

第3章 遺跡の概要

1. 近世大名津軽氏の成立と弘前城築城

近世大名・津軽氏は、諸史料からもとは南部氏の一族であったと考えられている。南北朝の争乱後、南部氏は十三湊・安藤氏の勢力圏であった津軽地方に進出し、安藤氏を駆逐する。その後、安藤氏再侵攻への押さえとして津軽地方へ派遣されたのが、津軽氏の祖となる南部光信である。

光信は延徳3年(1491)に種里城を築き(図版2)、そこを拠点として南部氏の津軽経営の一翼を担った。さらに光信は文亀2年(1502)、鼻和郡賀田に大浦城を築き(図版1)、子の盛信を配置する。盛信の子孫は「大浦」姓を名乗り、大浦城は築城から90年余りの間、大浦氏の居城として機能したとされる。

光信の5代後となる南部右京亮(大浦)為信は、元亀年間(1570~73)に石川城の南部高信を攻め落として以降、南部側の城を攻略して津軽地方の切り取りをはかり、天正18年(1590)頃までには豊臣政権に津軽地方の領有を認められた。為信は姓を「津軽」と改め、ここに近世大名・津軽氏が成立する。

為信は文禄3年(1594)に本拠を大浦城から堀越城へ移し(図版1)、以後、堀越城は慶長16年(1611)までの17年間、津軽氏の居城となった。この城は羽州街道上の要衝に立地し、また、旧南部氏の勢力圏であった岩木川東岸を治めるのに適していた。為信は堀越城への本拠移転に伴い、縄張りを求心的な構造とするとともに、本丸に礎石建物を配するなど大規模な改修を行っている(弘前市教育委員会2000~14)。しかし堀越城には石垣が導入されておらず、城下への家臣団等の集住も不十分であるなど、中世城郭から近世城郭への過渡期的様相を示しており、そのためか、為信はまもなく「高岡」の地に新城の築城を計画したようである。

『津軽歴代記類』等の文献によると、為信は慶長8年(1603)に「高岡」への町屋建設を命じるが、築城には着手することなく同12年(1607)、京都で没する。弘前藩官撰史書『津軽一統志』(享保16年(1731)成立)には、「高岡」への築城は2代藩主津軽信枚により慶長15年(1610)から進められ、翌16年に完成したとある。この「高岡城」は本丸南西隅に5層の天守を構えていたが、『津軽一統志』等によると、寛永4年(1627)に落雷のため焼失したとされる。天守焼失の翌年(寛永5年・1628)に地名が「高岡」から「弘前」へと改められたのに伴い、「高岡城」も「弘前城」と呼ばれるようになった。以降、「弘前城」は明治維新まで津軽氏の居城として、また弘前藩政の中心地として機能することとなる。

なお、当初4万5千石であった弘前藩は、4代藩主津軽信政の代に起きた寛文9年(1669)の寛文蝦夷蜂起(シャクシャインの戦い)以降、「北狄の押え」として蝦夷地警備の公的役割を担うようになる。その後蝦夷地警備の功が認められ、文化2年(1805)には7万石、同5年(1808)には10万石への高直りを果たしている。

2. 弘前城跡本丸東面石垣の履歴

(1) 近世の本丸東面石垣

享保16年(1731)に成立した弘前藩官撰史書『津軽一統志』や『封内事実秘苑』等の文献によれば、弘前城築城の際、本丸の石垣に使用する石材は長勝寺南西の「石森」や岩木山麓・兼平の「石山」(図版22・いずれも弘前市)といった石切丁場、大光寺(平川市)・黒石や浅瀬石(黒石市)などの古城館から運搬されたようである。また、『津軽徧覧日記』(弘前市立図書館八木橋文庫)等には、「伊藤六右衛門」「服部孫助」が石垣普請を担当したこと、普請に5~6年かかったこと、石垣に「鶴石」「亀石」という巨石を用いたことなどが記録されている。

弘前城本丸東面の石垣は、根石からの高さが天守台部分で約15m、その他の部分で約13mとなる高石垣で、文献資料等から近世のうち3時期の構築が想定されていた。最も初期のものは、慶長の築城時に積まれた石垣である。正保2年(1645)「津軽弘前城之絵図」(弘前市立博物館蔵)には、本丸東側に「石垣ノ築掛三十八間」と記載されている(図版12)。また、延宝5年(1677)「弘前惣御絵図」(弘前市立図書館蔵)でも、本丸東側に「石垣ツキカケ」の箇所が描かれる。築城時、本丸東面の南端・北端では

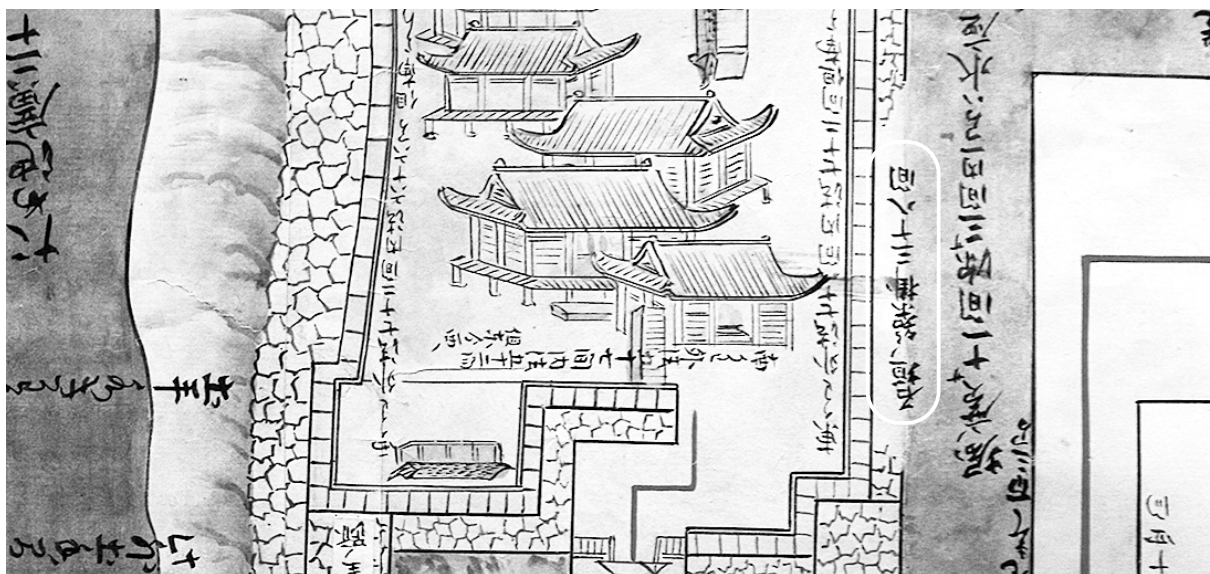
高石垣を完成させていたが、中央部の「三十八間」については大部分が土羽の状態であったと推測される。なお、現状の「三十八間」部分では、根石を含む下部3段程度が野面積み石垣となっている(図版23~25)。

次期の石垣は、元禄年間に4代藩主津軽信政によって積み足されたとされる、本丸東面中央部の石垣である。信政は、本丸の石垣築き足しをはじめ樋ノ口川の掘替工事や松の植栽、城の大手の変更(北から南へ)、元禄9~10年(1696~97)・宝永2・6年(1705・09)の武家屋敷郭外移転など、弘前城内の整備に尽力した藩主であった。『弘前藩庁御国日記』によると、元禄7年(1694)5月に幕府から石垣築造の許可を得た弘前藩は、同年7月に起工式である「御鋤初」を催している。同年9月より本丸南西隅の未申櫓台(旧天守台・図版9・11)から普請を始め、翌8年(1695)6月に本丸東面石垣の普請を本格化させた。『弘前藩庁御国日記』元禄8年5月18日条には、本丸未申櫓台石垣竣工に際し「穴生」「手艇」「鳶」「石切」「牛遣」といった職人たちに褒美を与えたと記述されている。しかし同年、冷害による凶作が原因となって飢饉がおこったため、8月には本丸東面石垣の普請を中断せざるをえない状況となった。その後弘前藩は元禄12年(1699)3月に石垣普請を再開し、同年5月には本丸東面石垣が完成している。この時点で、石垣が本丸を一巡する状況となったのである。

『弘前藩庁御国日記』等の文献によると、元禄の石垣普請においては岩木山麓・如来瀬の石切丁場(弘前市)が石材供給地となったようである(図版22)。築城期の石切丁場となった兼平と同じ岩木山麓であり、採取される石材はともに輝石安山岩である(弘前市教育委員会2013・弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室2015)。

現況でも本丸東面中央部約70mの天端~16段目までの範囲には、打込接・布積みの石垣が確認される(図版23~25)。この範囲における築石の石面の形状は長方形であるが、間詰石の使用も認められる。また、布積み石垣の下には3段程度の野面石の石垣が構築されているが、ふたつの積み方の境界ラインは、現況では波打つような形状となっている(図版23~25)。

3期目の石垣は、天守再建に先立ち文化6年(1809)に改築された天守台石垣である。築石の石面の形状は長方形であり、上下左右に接するすべての石を意識して徹底的に「合端」への加工が施された「切石」となっている。そのため、築石間に隙間が発生しておらず、間詰石も見られない(図版25・51・56・57)。また、合端の加工により石面の中央部が膨らみを持つ、いわゆる「コブ出し状」の石面となっている築石も認められる。



図版12 津軽弘前城之絵図(本丸部分拡大) 正保2年(1645)弘前市立博物館蔵



奈良文化財研究所蔵



青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ蔵
図版13 明治初期の弘前城天守(1)



弘前市笹森町・相馬家蔵



弘前市栄町・阿保家蔵

図版14 明治初期の弘前城天守(2)

(2) 弘前公園の整備と本丸東面石垣の修理

明治4年(1871)の廃藩置県により、弘前城は近世城郭としての役目を終えた。図版13・14は、その頃に撮影された写真である。同年、城跡は兵部省の管轄となり、本丸には東北鎮台第一分営が置かれた。明治6年(1873)の廃城令の後、同17年(1884)には本丸御殿・武芸所等の建造物が取り壊されたが(中園2011)、城門や二の丸の櫓などについては旧態を残すことが許され、現在に至る。

明治13年(1880)、旧弘前藩士の内山覚弥が三の丸に20本の桜を植樹したのを契機に、城跡への植樹が本格化する。明治15年(1882)には、同じく旧弘前藩士の菊池楯衛が二の丸を中心にソメイヨシノの苗木1,000本超を植樹、明治36年(1903)には再び内山が本丸・二の丸・四の丸一帯にソメイヨシノ1,000本を植樹し、「桜の名所」としての弘前城跡が形成された。

明治28年(1895)5月、津軽家が実質的な管理者となり、城跡は「弘前公園」として開放された。同31年(1898)には、陸軍第八師団の弘前設置に伴い三の丸に兵器支廠と火薬庫が建設され、城跡は軍隊の拠点としても機能するようになる。同35年(1902)には、津軽家より弘前市に公園管理の権限が委譲された。同42年(1909)には陸軍省より弘前市に、三の丸を除く城域が払い下げられた。

上述のように、弘前城が近世城郭から公園・軍隊の拠点へと役割を変化させていく明治時代以降、弘前城跡本丸東面石垣が2度にわたり崩壊し、修理されたことが公文書・新聞記事等に残されている(表2)。

弘前公園が開園する前年の明治27年(1894)4月、天守台付近の石垣が崩落した。弘前市立図書館蔵『旧城拝借二関スル書類綴』第1号(明治26~32年)に綴られる明治27年4月6日付の文書には、この時の石垣崩落について「…本丸東側石垣六七間程崩壊致之為メ同所巽隅櫓少シク傾斜致…」と記述される。同年5月7日には、第二師団監督部長から陸軍大臣へ「弘前城石垣修繕之件」と題した文書が発行され、設計書や図面などとともに石垣修繕の予算執行の伺いが出された。その後、7月には第二師団監督部より「弘前舊城本丸内隅櫓及礎石下石垣修繕工事」の工事請負入札広告が出され、8月1日より10月30日までの期限で第二師団陸軍修築部が石垣修築に着手、翌28年(1895)1月には竣工している。弘前市立図書館蔵『旧城内公園設置願伺届書類 甲 明治廿七年十月ヨリ』(TK-629-1)に、「弘前旧城本丸隅櫓下石垣及隅櫓揚方修繕工事設計書」が綴られている(図版15~17)。

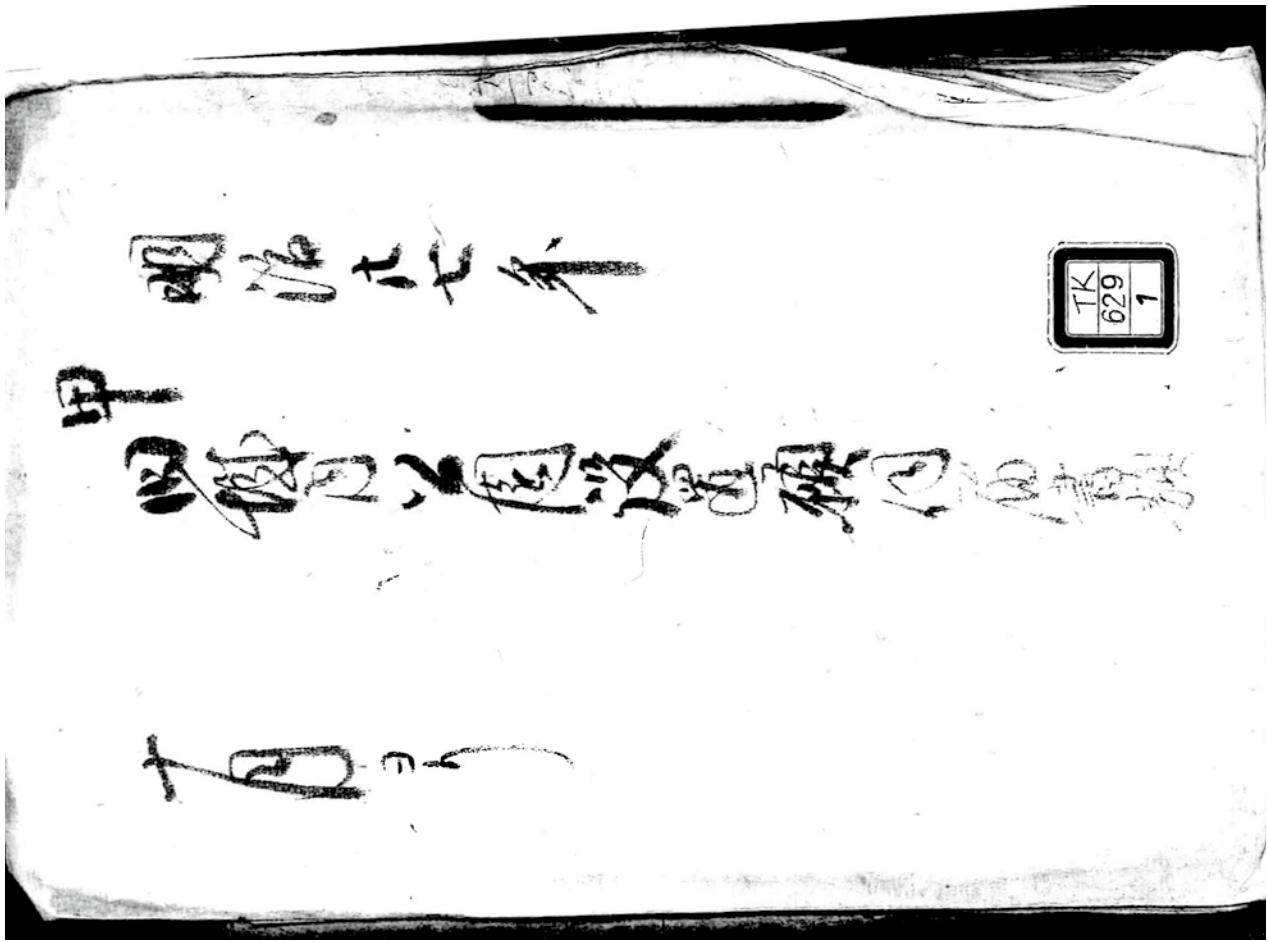
明治29年(1896)4月には、同27年の崩壊範囲より北側で石垣が崩壊している。弘前市立図書館蔵『旧城拝借二関スル書類綴』第1号(明治26~32年)に綴られる明治29年4月9日付の文書には「本丸天守閣石垣崩壊の図」が添付されており、この時の石垣崩壊状況を知ることができる(図版18-①)。翌30年(1897)には前年の石垣崩壊を受け、弘前市出身の大工棟梁・堀江佐吉が、天守転覆を避けるために天守を本丸の内部へと曳家した。弘前市立図書館蔵『旧城内公園設置願伺届書類 甲』(TK-629-1)には、この時の天守曳家に関わる文書が綴られている。明治29年の石垣崩壊に対しては、早急に修理の対応がなされることはなく、大正4年(1915)まで静観されていたようである。明治29年以降の崩壊石垣の状況や、曳家で移動した後の天守の様子は、当時撮影された写真に比較的多く確認することができる(図版18-②)。

大正4年(1915)に実施された石垣の修復と天守の曳き戻しに関する記述は、同年6~10月の「弘前新聞」に多く見られる。新聞記事には、陸軍特別大演習に伴う大正天皇の10月来弘に備え、弘前市が石垣修復・天守の曳き戻しをはじめとする弘前公園の整備に力を注いだ様子が記述されている。天守の曳き戻しを含む石垣修復工事を請け負ったのは堀江彦三郎で、7~10月という短期間のうちに工事を完了させている(図版18-③~⑤・弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室2018)。

なお、平成27年(2015)に実施した弘前城天守曳屋工事の際、天守土台を構成する角材の側面に径約3cmの円形貫通孔が複数確認されている(弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室2016)。これらの穴は、明治~大正時代に実施された天守曳家の痕跡である可能性がある(図版18-⑥)。また、同じく平成27年には、天守土台底面に明治~大正時代の曳家でついた「キリン器械」の痕跡も確認された。「キリン器械」とは、ネジの回転で生じる力を利用して重量物を垂直方向に持ち上げるジャッキであり、実物が由来不明のまま弘前城二の丸未申櫓に長く保管されていた(図版18-⑦)。平成27年の天守曳家の際、二の丸未申櫓に保管されていた「キリン器械」の頂部板の模様と、天守土台下に残っていた痕跡(くぼみ)が一致したため、明治~大正時代の天守曳家に係る器具であると特定されたものである(図版18-⑧)。

表2 弘前城跡本丸東面石垣 近代の石垣崩落と修理関係史料

文書年号	月	日	文書名・内容	発行	受取	所蔵機関	関係史料
明治27	4	6	「書按」…同城本丸東側石垣六七間程崩壊致之為メ同所異階槽少シク傾斜致至急修築ニ着手不致候…	市長	内務部長	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城拝借二間スル書類 綴第1号」明治26-32年	
明治27	5	7	「弘前城石垣修繕之件」弘前城石垣修繕之義ニ付同 弘前城内石垣別紙図面之通客月二日俄然崩壊致候石八本丸 階槽礎石ニ連結セル石垣ナリ以テ其儘差置トキハ建物ニ大関係有之候ニ付此際修繕致度依テ該費用取調候処金 千四百九十三円七十銭ヲ要スル見込ニ有之右八臨時ノ大修繕ニシテ本年度ニ於テ其費用ノ予算無之候得共難捨置 破損ニ付本年度各所修繕費之内ヲ以テ支弁致置度候間特別ノ御診議相成度別紙予算仕訳書設計書並図面相添此段相 候也	第二師団監 督部長 篠原国清	陸軍大臣伯 朗 大山巖	国立公文書館アジア歴史 資料センター(レファレン スコード:CO7005043700)	
明治27	5	19	「案」…弘前城本丸東側石垣崩壊ノ儀ニ付…頗煩々ノ遼南ニテ倍ニ崩壊ノ景状ニ候…	市長	第二師団監 督部長 篠原国清	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城拝借二間スル書類 綴第1号」明治26-32年	
明治27	7	10	工事請負入札廣告…弘前舊城本丸内階槽及礎石下石垣修繕工事…明治二十七年七月七日 第二師団監督部	東奥日報	—	—	
明治27	7	13	工事請負入札廣告…弘前舊城本丸内階槽及礎石下石垣修繕工事…明治二十七年七月七日 第二師団監督部	東奥日報	—	—	
明治27	9	5	弘前旧城本丸階槽下石垣及階槽場方修繕工事設計書第一部…同階下石垣及階槽場方修繕工事設計書第二部…	青森県内務 部長 坂平太	弘前市長 赤石行三	弘前市立図書館(TK-629-1) 「明治廿七年十月ヨリ 旧城内公園設置願向届書 類甲」	図版 15 ~17
明治27	9	20	御願按…弘前旧城本丸石垣崩壊ノ場所去ル八月一日ヨリ来ル十月三十日マデノ期限ニテ第二師団陸軍修築部ニ於テ 修築工事中…	市長	弘前警察署長	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城拝借二間スル書類 綴第1号」明治26-32年	
明治27	10	3	弘前旧城本丸石垣修繕工事ノ義ハ目下陸軍經營部ニ於テ修繕ニテ候…	—	—	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城拝借二間スル書類 綴第1号」明治26-32年	
明治28	1	7	「内二第六号」 弘前旧城石垣修繕工事竣功ニ付…	青森内務部 長 島出宗正	弘前市長 赤石行三	弘前市立図書館(TK-629-1) 「旧城内公園設置願向届書 類甲」	
明治29	4	9	「旧城本丸石垣破壊ニ付御届」 昨八日午後五時旧城本丸天守閣東ノ方 土台石垣並北向土台石垣ノ内埋没 仕り尚 同閣東北隅ヨリ北へ拾間余 石垣破壊前紙給図面ノ通ニ御座候…	公園管理者 須藤元雄	—	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城拝借二間スル書類 綴第1号」明治26-32年	図版 18 ①
明治29	4	12	「旧城本丸石垣破壊ニ付御届」 去ル八日本丸石垣破壊ノ儀不取御届及候得共詳細左ニ申シ上候同日午後二時 城監守人ヨリ御本丸階槽ノ下石垣二處ニ生ジテ二接続ノ石垣崩出シ候様ニ相見候間見分致候様申出ニ付直 接駐付見分之処申出ノ通階槽東北隅ノ石垣五寸六分明キヲ 生ジ同ジク北向キ土台石垣ノ内六尺位之箇石動致致 以上空際ノ所モ之レアラ又東向キ堀側石垣中程ヨリ下タノ方横ニ九間位ノ間稍々崩出シ今モ破壊可致様ニ相見 得大心配致候モ施スベキ方法モ無之候是致居候内同四時半頃迄二破壊致申候然レニ階槽ノ下タ其數破壊ニ相成 ノ患モ有之ニ付口申中迄二角材等ニテ切立ヲ以テ手当仕置申候即破壊所之 繪図面相添此段及御届候也	弘前市公園 管理者 須藤元雄	弘前市長 赤石行三	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城拝借二間スル書類 綴第1号」明治26-32年	
明治29	4	13	「石垣崩壊ノ事ニ付御報告」 弘前公園地旧城本丸石垣本月八日崩壊ニ御取扱九日附ヲ以テ及御報告候然レニ 右崩壊ニ係リタル原因詳細取調難相成得共公園管理者ヨリ報告ト其ノ状況トヲ考エ去ル二七年崩壊セシ場所 以北ヨリ崩壊ノ形状ヲ呈シタルヲ以テ考フル中一昨二七年崩壊セシ以前ニ於テ階槽下石垣二既ニ生ジシ為ニ地 中ニ隙間ヲナシタルモノト考エラレ候故ニ二七年中修繕ノ場所以外ヨリ起リ漸次修繕ノ場所ニ及ボシタルモノ ニ考工候尚又昨年ハ近來稀ナル大雪ニシテ之ガ融解ノ時季ニ際シ水分隙間ノ場所ニ滲入タル為ニ膨脹致シ崩壊トナリ タルモノト推考スルヨリ、他無之地震同様に破損ニテ有之候併之階槽転覆ノ憂無候様即充分手当致置候間紙給図面 相添再度御座及御報告候也	市長	知事	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城拝借二間スル書類 綴第1号」明治26-32年	
明治29	9	—	「弘前旧城内本丸階槽損下ノ義ニ付願」 弘前旧城内本丸階槽石垣崩壊ノ義ハ予テ本県知事へ報告ニ及 置候義ニ有之然レニ崩壊ニ係リタル二箇所ニ付テハ當時直ニ數十ノ真梁樑等ヲ用ヒ七箇階槽転覆防致居候得共建物 重量ノ莫大ナルタメ漸次崩壊前面モ膨脹致シ階槽傾斜ノ度ノ高メ始シテ転覆セントスルノ危機ニ差迫リタル実 況ニ候得者秋冬ノ候ニ際シ霖雨降雪相続キ地盤相緩ミ候曉ニハ南東ヨリ北ニ至ル前面一帯ノ石垣全部陥潰致階槽 転覆ハ必然ノ事ト被考候ニ付今ニシテ之ガ修繕若クハ移転等相当ノ手当ヲ不致候テハ現在ノ壯觀ヲ失フノミナ ラス公園唯一ノ建物ヲ徒ニ毀損セシムルハ遺憾ノ至リニ不堪候間紙給図面之通城門本丸南方ノ一階へ移転致永遠ニ保 存ノ上公園ノ美觀ヲ保護致度尤右移転ニ付テハ巨額ノ工事費ヲ要スル義ニ付特別ノ御診議ヲ以テ階槽無代備御届 下御許可被成度下本市会ノ決議ヲ經此段奉願候也	弘前市参事 会 弘前市長 赤石行三	陸軍大臣 大山巖	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城内公園設置願向 届書類甲」	
明治29	11	4	「弘前旧城内本丸階槽損下ノ義ニ付願」 弘前旧城内本丸 一 第壹号階槽 一棟 以損下代金五十円階槽土 石垣崩壊ノタメ転覆セントスルノ危機ニ差迫リ候故城 内南方ノ一階へ移転致シ之カ急支ヘンカタメ去八月 四日付以テ 損下代出願ニ及ビ候…	青森県弘前 市参事会 弘前市助役 関野	陸軍 臣子爵 高橋頼之助	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城拝借二間スル書類 綴第1号」明治26-32年	
明治29	11	27	七二〇〇号「弘前城階槽損下ノ件」 願之趣聞届ク但損下代備納付方及移転跡復旧工事に就テハ第二師団監督部ノ 指示ヲ受クベシ	弘前市参事 会 弘前市長 赤石行三	陸軍大臣 青森県参事 会	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城拝借二間スル書類 綴第1号」明治26-32年	
明治29	12	7	「御届」 旧城本丸階槽有備御届下許可相成候ニ付他所ヨリ引移保存支度候間請負人堀江佐吉ニ申付候処八日ヨリ 向フ日数三〇日ノ見込ヲ以テ引移可申候ニ御座候此段及御届候也	弘前市公園 管理者 須藤元雄	弘前市参事 会 弘前市長 長尾義連	弘前市立図書館(KD629-1) 「旧城拝借二間スル書類 綴第1号」明治26-32年	
明治30	6	12	弘前旧城本丸階槽移転ニ付地祭之為メ来ル十四日同所ニ於テ神楽執行仕候間此段及御届候也	弘前公園管 理者 須藤元雄	弘前市参事 会 弘前市長 長尾義連	弘前市立図書館(TK-629-1) 「旧城内公園設置願向届 書類甲」	
大正4	6	29	「弘前市會議案」石垣積立及天守閣移轉費金八千八百八圓五拾錢五厘…大正四年六月廿六日提出…	弘前新聞	—	—	
大正4	7	1	公園改築工事入札 公園本丸石垣改築(長さ四十三間)本丸階槽移轉(一棟)…	弘前新聞	—	—	
大正4	7	4	「公園修築の価値」…市の豫算では僅かに八千圓より計上して居らぬが八千圓で完全な者が出るや否やは疑問で ある、理事者の説明では充分専門家の調査を遂げ丈夫な根石が動いて居らぬと云ふて居るとの事だが嘗て工兵隊で 調査した時に根石は動いて居ると云ふ事を確かめたので之が根本的の積立は莫大の費用を要すると云ふので放棄 した事はある、夫れは濠の水が涸れた為めに根石を棄せて居る算盤木が全部腐蝕して居るとの事だ…	弘前新聞	—	—	
大正4	7	5	「公園修築工事入札 石垣修築と外壕浚渫」清水村堀江彦三郎氏に指名入札と成り…九千七百三十圓	弘前新聞	—	—	図版 18
大正4	7	7	「公園石垣階槽工程」弘前公園石垣改築及階槽(天守閣)移轉工事は過日より着手中なるが工程は左の如し…石垣 改築 割栗石自瀆砂利輸入…在來石垣解除運搬…石材加工及び壘土…在來裏込及土砂堀取除運…裏込及土砂運搬埋 戻場同共…	弘前新聞	—	—	
大正4	7	28	「公園石垣に就て」竹内市事業係長談「公園天守閣前の崩潰した石垣を修繕する以前には基石に大材木を使用して 居るとか立派な基石が有るとか又は有つても至つて興味な物だとかとて紛議コト々で吾々も工事に着手するに躊躇し た次第だが一昨日から昨日にかけて吾々の疑惑を解かんが為めに其実状を明細に検査したら矢張り之が基石で有 ると何人にも一見了解し得る者がなかつたので愈々不審の念に堪えなかつたから更に手段を變へて調査すると成程 吾々が想像した様な基石がないのが道理で有る、其れは水面下四尺位一帯の地盤は非常に強固で恰かも岩石の如く である而して如何四尺位の深さ有る部分には巨大な石を不秩序に澤山埋沈して居つて之が所謂基石の代用と成つて 居るので有る…此原因が手傳つて層崩潰の破目に陥つて居るのか…其根本原因を確めたので有る、其れは裏 込石に接して居る土が幾條も垂裂有る軟弱な粘層で有ると今一は設計の原則に相違して居る粗雑な裏込石が有る 事である、此粘層に澤山の垂裂を生じたのは學理から推考すると地震に依つて發生した者だ相対降雨有る度に雨 水が其垂裂に侵入して粘土を益々脆軟ならしめたから遂に其重量に堪え切れずして陥沈したの之を支持する効力 がない裏込石を激しく壓迫したの直に外部の石垣に影響を及ぼし斯くて其度数を重ねるに従つて果ては潰崩の余 儀なきに至つた者であるから今回の修繕工事は該垂裂部分を悉皆除去し裏込石を出來得る限り稠密ならしめ各積 石の間にはコンクリートを充分に塗布して其連繫を完全ならしめ所謂大紀記念事業として永劫崩潰せぬ様に改築 しようと思つて居る…	弘前新聞	—	—	
大正4	10	13	「秋晴の鷹揚園 修築後の弘前公園」…本年は大演習を控へて居るので畏くも聖上陛下御幸の爲め弘前市會は二万 數千圓を費して崩れて居る石垣は勿論、隅欠倉の移轉から四阿の設置、道路から濠の浚渫迄一生懸命(ママ)命心血 を注いだ…	弘前新聞	—	—	
大正4	10	14	「秋晴の鷹揚園(二) 修築後の弘前公園」…本丸の崩れた石垣は悉く積み直され隅欠倉も昔の位置に移され、ただ 足代許りが工事の名残を止めて居るかの様に思はれた。公園修築の半分以上は此隅欠倉の移轉と石垣の積み直すに 費されたのであるが最初の豫算は両方一萬圓足らず、然し石垣の根石が動いて居つた為めに基礎工を施す費用は 別に掲げた積りであるから實際は一萬圓以上を要して居る。それは中々々の難工事であつたが青葉吹く薫風の頃か ら起工し僅か四ヶ月足らずの短い日数で竣工したのは流石に見上げた者だ…	弘前新聞	—	—	図版 18 ⑤~⑧
昭和11	11	—	○本丸東方の石垣崩落 明治二十九年四月八日午後四時頃、本丸東方の石垣崩ること十四五間。 是より先、明治二十七年二月十日より十三日迄入り強地震ありしが其れより後十日も経ざる(殆ど雪消の 後)天守閣土階閣かけて北方へ十二三間の間、石垣(乱積の分)但し天守閣の土台、東北の隅は西方へかけて石三 ヶ崩れたり。 閣東方へ傾くこと一尺斗り也し、其の秋迄修復せり(閣を西方の石垣の上迄引移し)、其時の請 負技師八田建築を笑ひつつ、此度は石垣の石一つ毎其の根尻へ中取交ぜ、石を積入れたから大丈夫なりとせり、 然る此度未だ二ヶ年も経ざる右石の失敗なり、尤も今度の崩壊の主点は閣の下の石垣より発せしが如しと也。	中村良之進	—	弘前市立図書館(YK091- 1-5-12)中村良之進「神 紙十二」	



図版 15 旧城内公園設置願伺届書類 甲 明治廿七年十月ヨリ (弘前市立図書館蔵)①

石垣本丸隅楯下石垣及隅楯揚方修繕
 工事設計書券一部
 隅楯下石垣長 砂敷七高寸 平面積 白砂敷七六寸 修繕
 隅楯去藏造之屋 桁行三高尺五寸 平面積 六尺六寸多 揚方不陸修繕
梁間五高尺五寸
 同楯下石垣及隅楯揚方修繕工事設計書券二部
 石垣破壊別紙閉面附等之場石氷盛遣形ヲ設テ根
 加 在赤石垣面ヨリ内方 上四間 石垣底敷ニ于テ
下三間
 采才割栗石切込砂利ヲ入高 三尺 毎三丈幅ニテ

突キ水六枚石撒布し尙ホ小棒ニ充分ニ突堅メ

術次ニ突キ上リ埋堅ム

但割栗石、在来ノ分ヲ使用し尙ホ不足、都テ

城内方ニテ掘り取ル又、同所ニ散在ノ分ヲ運

搬使用ス

石工職

石垣破壊ノ所、足代ヲ架設し崩壊ノ檢知石並ニ城
内散在ノ檢知石ヲ取り集テ合口削深ヨリ切り合セ据

付檢知表込、割栗石切込砂利ヲ入檢知石各個

毎ニ水ヲ灌キ鉄棒ニ充堅メ尙ホ檢知石不足、

分ニ檢知石面砂利天_和硬石ヲ以テ前文同様合口切

合セ据付

但割栗石切込砂利、城内散在ノ分ヲ取集テ使用

大工職及人足

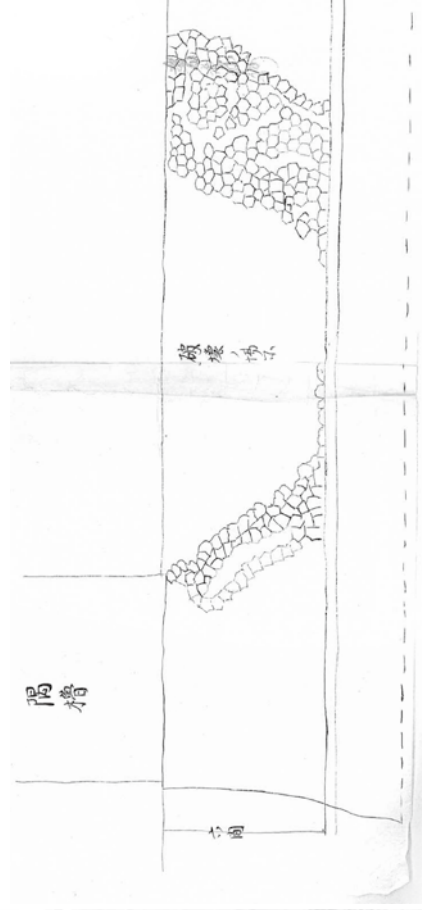
橋檣不陸揚方、平均水盛遣形ヲ取設ケ及足代ヲ

架設し不陸曲形ヲ直シ尙メ堅メ破壊ノ所在来

二 倣と修築ヲナス
 弘前市立図書館蔵



明治 27 年 (1894)
 「弘前旧城本丸内隅槽下石垣断面之図」



明治 27 年 (1894)
 「弘前旧城本丸内隅槽下石垣 前面之図」

内二卷二九七二号

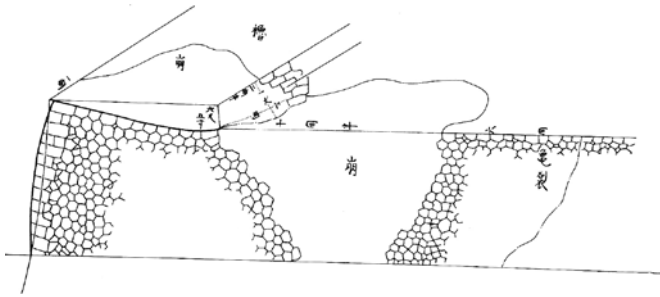
此圖及書之為弘前市立図書館蔵之件列載之申
 以茲令其抄本之有該城之段亦因下卷二行圖空
 會部之世令申之有石目交有可表其本條之公的
 占此版及通標也

明治廿九年九月五日

者希何

圖書館長 服坂平太 印

弘前市長亦右行之啟



①明治29年(1896)「本丸天守閣石垣崩壊の図」
弘前市立図書館蔵



②明治30～35年(1897～1902)の弘前城
光村寫眞部1902『仁山智水帖』より引用



③天守台南東角石「仰角-2」右側面銘文



④天守台南東角石「仰角-3」下面銘文



⑤大正4年(1915)の石垣修理状況
(弘前市企画部広聴広報課蔵)



⑥天守土台角材の側面に入る貫通孔 西から



⑦キリン器械(二の丸未申櫓にて発見)



⑧天守土台下面についた「キリン器械」の痕跡

(3)大正4年の石垣修築

平成29年(2017)の発掘調査等において、堀江彦三郎が請負人となった大正4年(1915)の「石垣修築」であることを示す文献・遺構・遺物が確認されている。(弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室2018)。

ひとつ目は、天守台石垣の2石目上面レベル(天端より約50cm下)で確認された地鎮遺構である(弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室2018)。平面的には、天守台中央部のやや西側で確認された。近代以降の遺物を含む盛土を掘り込んで掘方を設け、その中に約50cm角のコンクリート枠を据えて平石(000-145)の蓋をしていた。蓋石の(000-145)上には天端の敷石(大型の石材層)が敷かれており(図版66)、圧力のためか3つに割れていた。コンクリート枠には約30cm角の穴が設けられており、その中央部には徳利2点・盃2点・木製笏1点を入れた壺型の真鍮製(または亜鉛メッキ製)容器が納められていた(図版19)。また、四隅には同様の材質で作られた楯(けつ)が1本ずつ、計4点立てかけられるような状態で確認された。天端の敷石の隙間には円礫が充填されていたが、蓋石が割れたためか、円礫がコンクリート枠内に東側から流れ込むように堆積していた。

地鎮遺構から出土した真鍮製(または亜鉛メッキ製)容器は、蓋を含めた高さが19cm、幅14.2cmであり、表面には「八円 五円 銅八円 白銅七円」の墨書が認められる。徳利・盃は、ともに銅板転写で絵付けされた磁器である。徳利2点は高さに若干の違いが認められるが、高い方で10.9cm、幅はともに4.2cmである。表面には同じ絵柄が描かれている。盃2点も高さに若干の違いが見られ、高い方で4.4cm、幅はともに4.2cmである。こちらも絵柄は同じである。木製笏は長さ12.7cm、幅1.8cm、厚さ1.0cmである。楯(けつ)4点も個体によって若干の違いはあるが、ほぼ同じ大きさである。最長の長さが24.8cm、最短が24.4cm、幅はすべて2.4cmである。徳利や盃、楯(けつ)は和紙にくるまれた状態で納められたものと見られ、発見時に和紙の細片が付着していた。徳利の中には液体が入っていたが、長期間地中であつたことにより生じた水と思われる。また、盃のうちのひとつには土が詰まっていた。

この遺構が構築された「地鎮祭」については、大正4年10月8日付の弘前新聞・東奥日報に記事が掲載されている(弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室2018)。地鎮祭は10月7日午前11時頃、「公園本丸東南隅」にて神職により執り行われたようである。

ふたつ目としては、天守台南東角石の2・3石目に、当時の弘前市長名や請負人・職人名を彫った銘文が確認されている。上から2石目の「イロ角-2」の北面(右側面)には「大正四年十月一日 爲 御即位大典 紀念修築之當事者 弘前市長 長尾義連」(図版18-③)、3石目「イロ角-3」の下面には「大正四年七月起工 十月竣工 請負人堀江彦三郎 齋藤伊三郎 堀江金藏 堀江幸治 古川周次郎 石工亀岡周吉 鳶方井筒才太郎 乗田藤太郎 鎌田善助」(図版18-④)と刻まれている。この件については、大正4年8月30日付の弘前新聞「大典を如何にして紀念し奉る可きか」に弘前市参事員・秋庭有穂が語ったこととして、「市に於ては市長を始め名譽職たる議員及直接工事に當つた請負人の姓名を石に刻して修築の紀念を残す積りになつて居る」と記述されている(弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室2018)。この2石については、大正4年の修理時に動いていることは明白であるが、石材の形状と古写真に残る天守台石垣の様相から、明治時代初期にも同じ位置に積まれていたものと推測される(図版13・14)。



図版19 弘前城天守台地鎮遺構(遺構内部確認状況・出土遺物)

3. 地理的・歴史的環境

弘前市は、本州最北端・青森県の南西部に位置する。市域の東部から南部にかけては、南津軽郡藤崎町・田舎館村・大鰐町及び平川市に、西部は西津軽郡鮭ヶ沢町及び中津軽郡西目屋村に、北部はつがる市及び北津軽郡鶴田町・板柳町に接している。弘前市の人口は約17万2千人であり、弘前藩成立以来、津軽地域を中心都市としての役割を担っている。市街地には近世の面影が残り、城下町特有の情緒を醸し出している。

青森県西部には広大な沖積地である「津軽平野」が広がっており、弘前市の位置はその平野の南西部に相当する。地形は東側を奥羽脊梁山地、西側を標高1,625mの岩木山、南側を世界自然遺産・白神山地に囲まれる盆地状であり、平野中央部を岩木川が北流する（弘前市教育委員会2014）。岩木川は白神山地を水源とし、同じく白神山地から流れる平川や浅瀬石川等の支流と合流して津軽平野を形成し、十三湖に入り日本海に注ぐ。

弘前市街地は洪積台地の末端部に展開しており、標高約120mから北へ緩やかに傾斜し、北部の和徳付近で標高25～30mとなる。市街地東部は、標高20m以下の低平な地域である。弘前城跡の周辺地形は、大きく台地と低地に区分される。台地は「弘前台地（Ⅲb）」と称され、「目屋丘陵（Ⅱa）」や、低地である「岩木川谷底平野（Ⅳb）」との間に分布する。弘前台地は、GtⅠ、GtⅡ、GtⅢの3つの地形面に細分される（図版20）。GtⅠ面は弘前市街地南方の笹森山（標高106.3m）付近を模式地とする地形面で、標高は約90～140mを測る。GtⅡ面は標高約40～60mを測る地形面であり、上位のGtⅠ面とは傾斜変換部により、また下位のGtⅢ面とは約1mの段丘崖により区分される。GtⅢ面は、谷底平野と約3～5mの段丘崖によって区分される。

「弘前台地」上に市街地（城下町）が広がり、台地縁部のGtⅡ面に弘前城跡が位置することとなる。低地は岩木川・相馬川沿いに分布する扇状地性の低地に当たり、「岩木川谷底平野（Ⅳb）」と称される。弘前城跡の西方～北方に相当する地域である（公益財団法人文化財建造物保存技術協会2011a）。

弘前城跡周辺の地質は、新第三紀中新世の大和沢層～鮮新世の東目屋層を基盤とし、上位には第四紀更新世の段丘扇状地堆積物、山田野層、泥流堆積物及び完新世の沖積低地堆積物が分布する（図版21）。弘前城跡の立地する「弘前台地」を構成する地質は、第四紀更新世の泥流堆積物が主体となる（公益財団法人文化財建造物保存技術協会2011a）。

弘前城跡は弘前市の南東側にあり、岩木川の右岸段丘上に当たる標高46m地点から、段丘下に当たる標高29m地点にわたり立地する。本丸・北の郭・二の丸・三の丸が段丘上に、四の丸・西の郭が段丘下に相当し、段丘境には文禄3年（1594）の開削と伝わる幹線水路「二階堰」が流れる（弘前市教育委員会2011）。

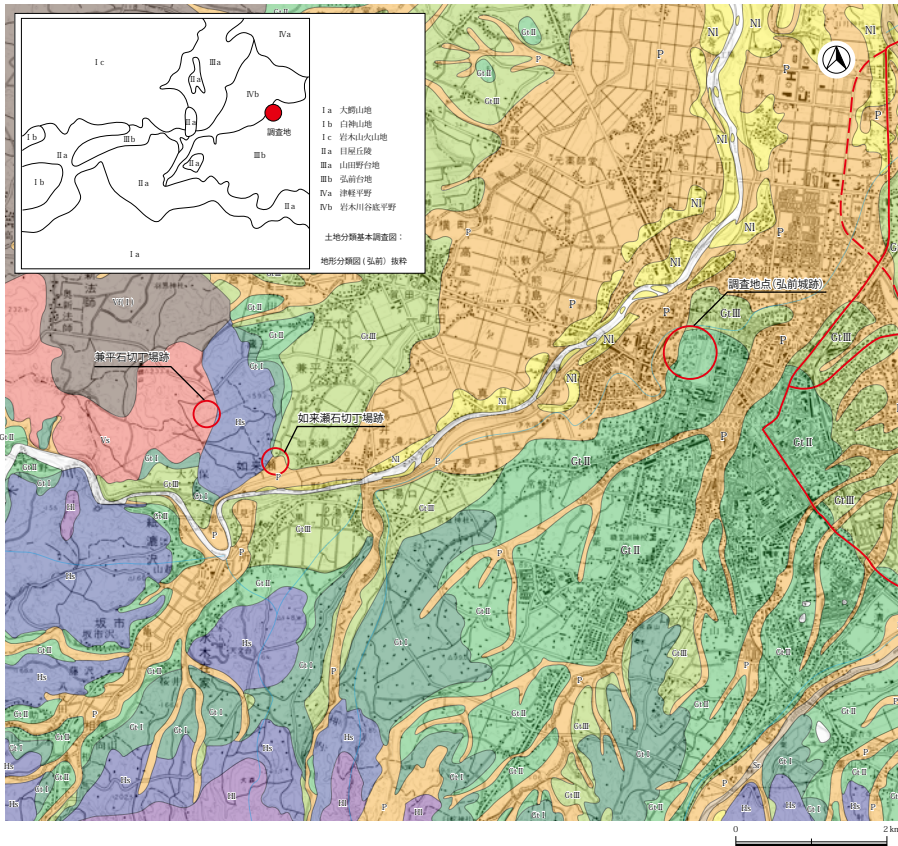
各郭の標高は本丸で約46m、北の郭で約38m、二の丸で約37～42m、三の丸で約36～44m、四の丸で約29m、西の郭で約30mを測り、本丸が最も高く、四の丸が最も低い（弘前市教育委員会2009）。

弘前市内においては、平成31年（2019）3月時点で456カ所の遺跡が登録されている。そのうち、弘前城跡（遺跡番号：74）の周辺に所在するものを図版22・表3に示す。

弘前城跡周辺の近世遺跡には、蔵主町遺跡がある（75）。蔵主町遺跡は、弘前城跡のすぐ東側に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、平成24年（2012）の発掘調査において城下の町割の痕跡が確認されている（青森県教育委員会2014）。また、同じく城下町遺跡として、市街地に城下町本町遺跡（431）がある。

如来瀬石切丁場跡（452）は、元禄7～12年（1694～99）の弘前城本丸東面石垣の築き足しの際、石材の供給源となった遺跡である。平成23・24年（2011・12）に弘前城本丸石垣修理事業の一環として現況調査が実施され、幅9～16cmの矢穴の残る輝石安山岩の巨石が複数確認されている。その成果を受け、遺跡として登録された（弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室2015）。如来瀬石切丁場跡の北西には、兼平石切丁場跡が所在する。こちらは遺跡としては未登録だが、慶長16年（1611）弘前城築城時の石材採取地のひとつとして知られる。こちらにおいても平成24年に現況調査が行われており、近現代まで採石を行っていた痕跡が確認された（弘前市教育委員会2013）。

その他、遺跡として登録されたものではないが、市内銅屋町の金剛山最勝院境内には、元禄8年（1695）の本丸旧天守台（未申櫓台）石垣修築の際に発見された「不動明王の梵字石」が現存している（弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室2016）。



凡例 LEGEND

山地 MOUNTAINS

- MI 大起伏山地
Larger relief mountains
- Mm 中起伏山地
Middle relief mountains
- Ms 小起伏山地
Smaller relief mountains
- VL 大起伏火山地
Larger relief volcanic mountains
- Vm 中起伏火山地
Middle relief volcanic mountains
- Vs 小起伏火山地
Smaller relief volcanic mountains
- Vi(1) 火山麓地
Volcanos' feet

丘陵地 HILL LANDS

- HI 丘陵地 (I)
Larger relief hill lands
- Hs 丘陵地 (II)
Smaller relief hill lands

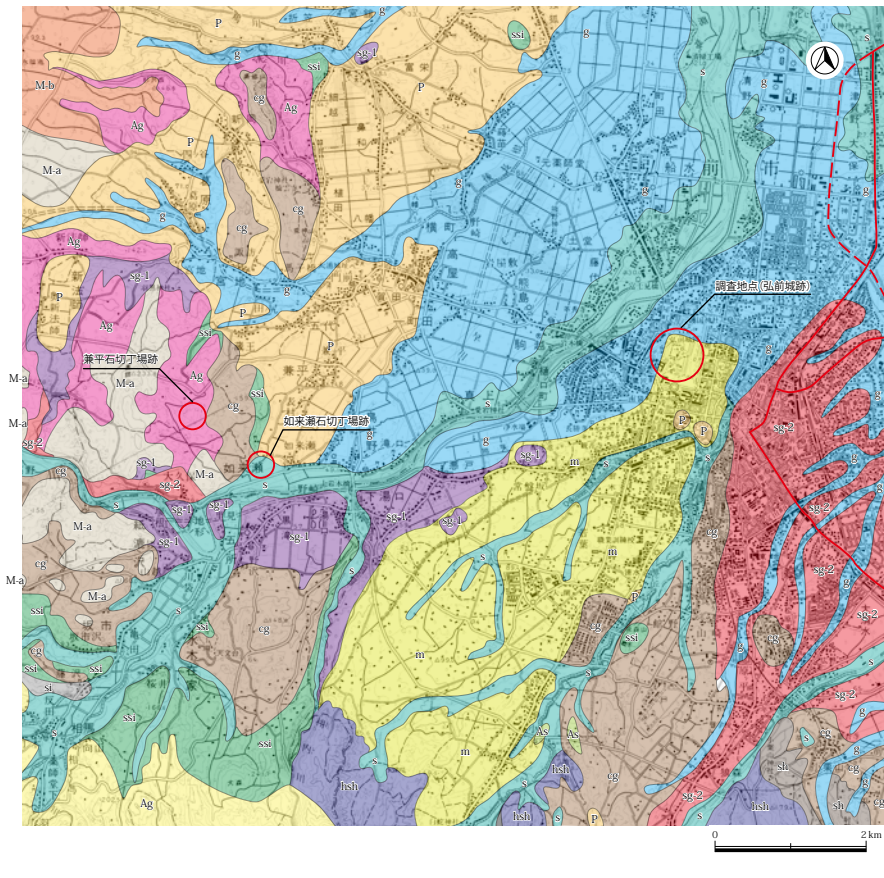
台地 UPLANDS

- Gt I 砂礫台地 I
Gravel terrace I
- Gt II 砂礫台地 II
Gravel terrace II
- Gt III 砂礫台地 III
Gravel terrace III

低地 LOWLANDS

- P 谷底平野
Valley plains
- F 扇状地
Alluvial fans
- NI 自然堤防
Natural levees
- Sr 河原
Snadbank

図版20 地形分類図 (青森県：土地分類基本調査－弘前一)



凡例 LEGEND

未固結堆積物
Unconsolidated sediments

- s 砂がちな堆積物
Sand-rich sediments
- 8 礫がちな堆積物
Gravel-rich sediments
- sg-1 砂および礫 (1)
Sand and gravel
- sg-2 砂および礫 (2)
Sand and gravel
- sg-3 砂および礫 (3)
Sand and gravel
- m 泥流
Mud flow
- eg 粘土礫
Clay and gravel
- sc 砂および粘土
Sand and clay
- ssi 砂岩および砂質シルト岩
Sandstone and sandy siltstone
- sl シルト岩
Siltstone
- Pt 浮石質凝灰岩
Pumiceous tuff
- sh 黒色頁岩
Black shale
- Ag 安山岩質集塊岩
Andesitic agglomerate
- hsh 硬頁岩
Hard shale
- ss 砂岩および砂質凝灰岩
Sandstone and sandy tuff
- rt 流紋岩凝灰岩
Rhyolitic tuff
- At 安山岩質凝灰岩
Andesitic tuff
- cb 礫岩
Conglomerate
- ch 珪岩および粘板岩
Chert and slate
- As 火山灰
Ash
- P 浮石流堆積物
Pumice flow sediments
- Ma 火山泥流 (a)
Volcanic mud flow (a)
- Mb 火山泥流 (b)
Volcanic mud flow (b)
- Mc 火山泥流 (c)
Volcanic mud flow (c)
- Ag 火山礫角礫岩および火山角礫岩
Lapilli tuff and volcanic breccia
- Ab-a 安山岩溶岩 (A)
Andesite lava
- Ab-b 安山岩溶岩 (B)
Andesite lava
- Ry 流紋岩
Rhyolite
- An-1 安山岩 (1)
Andesite (1)
- An-2 安山岩 (2)
Andesite (2)
- Gr 花崗岩質岩石
Granitic rocks

固結堆積物
Consolidated sediments

- 山田野層
Yamadano formation
- 前田野野層
Maedano formation
- 東目屋層
Higashimaya formation
- 大秋層
Taiki formation
- 田代凝灰岩部層
Tashiro tuff member
- 松本平層
Matsukitai formation
- 相馬安山岩質集塊岩類
Soma andesitic agglomerate
- 大和沢層
Owasawa formation
- 砂子瀬層
Sunakose formation
- 藤倉川層
Fujikuragawa formation
- 尻高山山層
Shirakayamazawa formation
- 基成礫岩
Basal conglomerate

新火山噴出物
New volcanic products

- 中央火山丘 寄生火山溶岩
Central cone and parasitic lava
- 外輪山溶岩
Somma lava

火山噴出物
Volcanic products

深成岩
Plutonic rocks

第四紀
Quaternary

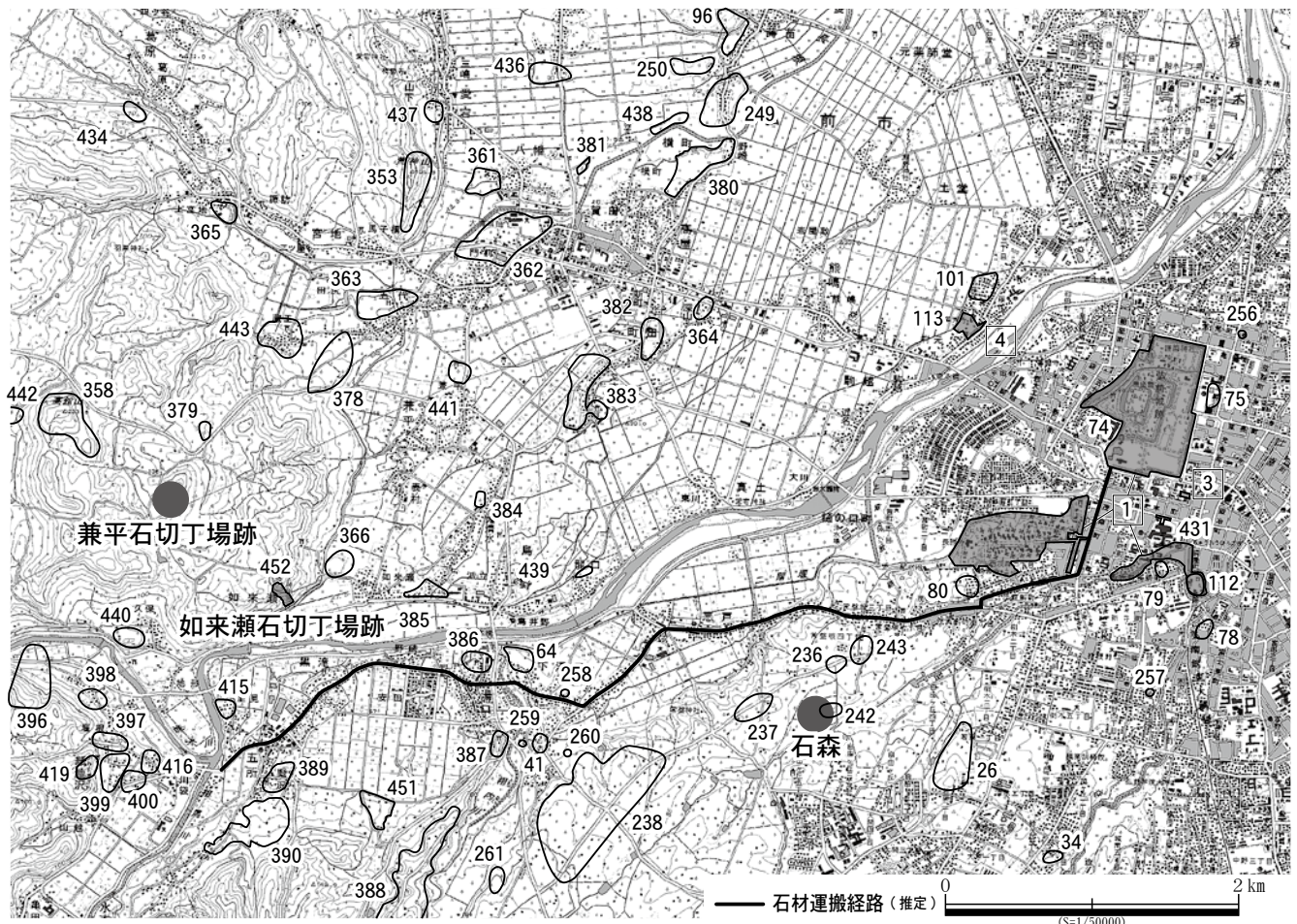
鮮新世
Pliocene

中新世
Miocene

先第三紀
Pre-Tertiary

第三紀
Tertiary

図版21 表層地質図 (青森県：土地分類基本調査－弘前一)



図版 22 石切丁場跡の位置と史跡周辺の遺跡 (弘前市教育委員会文化財課作成のものを一部改変)

[1]は史跡津軽氏城跡弘前城跡、[3]は吉田松陰来遊の地、[4] (113)は曹洞宗津軽山草秀寺。

表 3 史跡周辺の遺跡

番号	名称	所在	現況	種別	時代
1	沢部 (1) 遺跡	小栗山字沢部 225 の 71 外	山林・畑	包蔵地・平安	縄文・弥生・平安
3	天王沢遺跡	小栗山字沢部 226 の 58 外	畑	包蔵地	縄文
4	桜山遺跡	糠野字桜山	畑・田	包蔵地	縄文・平安
26	若葉遺跡	若葉 1・2 丁目	畑	包蔵地	縄文・平安
34	旭ヶ丘遺跡	旭ヶ丘 2 丁目	宅地・畑	包蔵地	平安
41	野際遺跡	下湯口字野際	畑	包蔵地	縄文
64	青柳館遺跡	下湯口字青柳 59 の 9	宅地・畑	城館跡	平安
74	弘前城跡	下白銀町、西茂森 1・2 丁目、南塘町、桶屋町、銅屋町	公園・寺院・宅地	城館跡	縄文・平安・江戸
75	蔵主町遺跡	蔵主町	宅地	包蔵地	縄文～江戸
78	紙漉町遺跡	紙漉町	宅地	包蔵地	縄文
79	新寺町遺跡	新寺町	境内	包蔵地	縄文
80	西茂森遺跡	西茂森	境内	包蔵地	平安
96	蒔苗館	蒔苗字野田外	畑・宅地	城館跡	平安・中世
101	藤代館	藤代 1 丁目	宅地・畑	城館跡	歴史
112	出間館	銅屋町	境内	城館跡	縄文・平安・安土桃山・江戸
113	津軽山草秀寺庭園遺跡	藤代 1 丁目 4 の 1	寺院	庭園	江戸
236	寺沢 (1) 遺跡	清水富田字寺沢、常盤坂 4 丁目	畑	散布地	平安
237	中野 (1) 遺跡	悪戸字中野	畑	散布地	平安
238	中野 (2) 遺跡	悪戸字中野、下湯口字村元・扇田	畑	包蔵地・集落跡	平安
242	寺沢 (2) 遺跡	清水富田字寺沢	畑	散布地	縄文・平安
243	常盤坂遺跡	常盤坂 1・4 丁目	畑・宅地	散布地	縄文・平安
249	油伝 (1) 遺跡	蒔苗字油伝	畑・宅地	散布地	平安・中世
250	油伝 (2) 遺跡	蒔苗字油伝	畑・宅地	散布地	平安
256	平清水窯跡	小人町、若党町	宅地	窯跡	江戸
257	下川原窯跡	梧棲野 1 丁目 20 の 12	雑木林	窯跡	江戸
258	悪戸青柳窯跡	下湯口字青柳 68	宅地	窯跡	江戸・近代
259	悪戸野際窯跡	下湯口字扇田	畑	窯跡	江戸・近代
260	悪戸扇田窯跡	下湯口字村元	畑	窯跡	江戸
261	扇田 (1) 遺跡	下湯口字扇田	畑	散布地	縄文・平安
353	荒神山遺跡	新法師	畑	墳墓	中世
358	高館遺跡	新法師	山林	散布地・城館跡	縄文・平安・中世
361	八幡館	八幡	畑・宅地	城館跡	中世
362	大浦城跡	五代字早稲田	畑・宅地	城館跡	平安・中世
363	築館	五代字山本	畑・境内	城館跡	中世
364	一町田館	一町田	畑・宅地	城館跡	中世
365	葛原館	宮地	畑・宅地	城館跡	中世
366	山下館	駒越字如来瀬	田・畑	城館跡	中世

番号	名称	所在	現況	種別	時代
378	五代山元 (1) 遺跡	五代字山本	畑	散布地	平安
379	五代山元 (2) 遺跡	五代字山本	畑	散布地	縄文
380	松本遺跡	横町字松本 91 の 1 外	田・畑・宅地	散布地	縄文・平安
381	平塚遺跡	八幡字平塚	田・畑	散布地	平安
382	村元遺跡	一町田字村元 759 外	畑・宅地	散布地	平安
383	浅井遺跡	一町田字浅井 462 外	田・畑・宅地	散布地	縄文・平安
384	長田遺跡	鳥井野字長田 167 の 1 外	畑・宅地	散布地	平安
385	種本遺跡	如来瀬字種本 70 外	畑・宅地	散布地	平安
386	石堂遺跡	湯口字ニノ安田	宅地	散布地	縄文
387	茶白館遺跡	湯口字ノ下り山 10	公園	館跡	縄文・平安・中世
388	湯口長根遺跡	湯口字ノ下り山	畑	集落跡	縄文
389	五所神社遺跡	五所字野沢 79 の 1 外	境内	散布地	縄文・平安
390	蟹沢遺跡	五所字野沢 125 外	畑・宅地	散布地	平安
396	幸神遺跡	紙漉沢字堰根	畑	集落跡	縄文
397	白山堂遺跡	紙漉沢字山越 132 外	畑・宅地	散布地・集落跡	縄文・平安
398	及位 (1) 遺跡	紙漉沢字山越 149 外	畑	散布地	縄文
399	及位 (2) 遺跡	紙漉沢字山越 164 の 2 外	畑・宅地	散布地	平安
400	館の下遺跡	紙漉沢字山越 118 の 1 外	畑・宅地	散布地	平安
415	里見館	五所字里見	宅地	城館跡	中世
416	紙漉沢遺跡	紙漉沢字山越	宅地	城館跡	中世
419	長慶天皇御陵墓参考地遺跡	大助字竜ノ口	畑	墳墓	中世
431	本町	本町	宅地	城下町	近世
434	茂上 (3) 遺跡	葛原字茂上	畑	散布地	縄文・平安
436	西田遺跡	鼻和字西田	畑・宅地	散布地	縄文・平安
437	長沢遺跡	八幡字長沢	畑	散布地	縄文・平安
438	平塚 (2) 遺跡	八幡字平塚	畑	散布地	平安
439	左り田遺跡	龍ノ口字左り田	畑	散布地	平安
440	大久保平遺跡	如来瀬字大久保平	畑	散布地	縄文
441	沼田遺跡	五代字沼田	畑	散布地	平安
442	従弟沢遺跡	五代字従弟沢	畑	散布地	縄文・平安
443	宮本遺跡	宮地字宮本	畑・宅地	散布地	縄文・平安
451	一ノ松本遺跡	黒滝字一ノ松本	畑	散布地	平安
452	如来瀬石切丁場跡	如来瀬字山田	境内・山林	生産遺跡	近世